

さちひろ

発行：天理教狭千廣分教会 〒589-0021 大阪狭山市今熊1-1133 TEL072-365-2571

E-mail:wai@sachihiro.com url:http://sachihiro.com 編集兼発行人・山口 渡

天理教狭千廣分教会の広報紙

- 1面・みんなの教理入門(7)
- 2面・幸せを届ける言葉
- 3面・連載・おさしづの点滴
- 4面・教会の動き・編集後記

教会の動き

- 朝づとめ：毎朝・6時30分
 - 夕づとめ：毎夕・7時00分
 - 春季大祭：1月21日午後1時30分
 - 秋季大祭：10月21日午後1時30分
 - 月次祭：毎月21日 午後1時30分
 - 春・秋季霊祭：3月22日・9月22日 午後1時30分
- ※教会の場所は、左の地図の紫マーカー。市立公民館の裏・西側です。



■**子どもおぢばがえり回参**
今年も子どもおぢばがえりの季節がやってきました。7月26日～8月4日まで天理市・天理教教会本部で開催されました。当教会からは、28・29両日に団参いたしました。



会場に向かって出発・詰所前にて

■**天理青年躍進の集い**
創立90周年を記念して「天理青年一手一躍進の集い」が、9月15日をかきりにグランキューブ大阪（大阪国際会議場）などで開催されます。

編集後記

▼今年も夏がやってきました。夏と言えば「子どもおぢばがえり」です。上にありますと折、28日・29日と1泊2日で参加しました。去年と同様、運転手付のマイクロバスで送迎していただきました▼あいにく28日夜と29日昼に降雨があつて、予定が少し狂いました。それでも子どもたちは、非常に元気で、予定したスケジュールを消化して無事終わりました▼3女と4女は、27日・28日と上級の鼓笛隊として帰参、引き続き教会の団参に合流してくれました。そしてきょうから大阪教区のひのきしんに合宿で参加しています▼そんな話も含めて日々の話題を綴るブログもご覧ください。http://sachihiro.com「#やまさんのブログ」から入れます。

さちひろ 第28号

編集兼発行人・山口 渡
平成20年8月5日
大阪狭山市今熊1丁目1133番地
TEL・072136512571



「みんなの教理入門」連載・7 この世 《元初り》

天理大学名誉教授・芹澤 茂

天理教の教えを、天理教学の泰斗・芹澤茂先生がわかりやすく解説します

日常なこともなく無事にくらししているときは、をれほど深い考えもなく生きてるのが普通である。しかし、人生には色々なことがあるので、生活につかれたり、困難な事情にぶつかつたりすると、こんな生活でよいものだろうかとか、生きるとは一体どういうことか、など、深刻なことを考えざるを得なくなる。これはだれでも経験することである。

このように、人生の意義を問うことは、どんな人にも起きてくることで、しかも非常に大切なことである。

人間がこの世に生まれ、住み、生活している意義は何であろうか。

これは「元(もと)初まり」の教理(「元の理」)のなかに教えられている。

この教理は、人間と人間の住む世界、すなわち「この世」がどのようにして出来てきたかを物語する話、「元初まりの話」として教えられた。この

なかに、この世の元(根本的な真実)、すなわち人間生活の意義が教えられているので、その要点を述べることにする。

(元初まりの話には様々な教えが含まれているので、のちに《連載25》もう一度話題にする予定である)

「親神様は、その守護のお働きによって、人間と人間世界をおつくりになられた。人間の陽気ぐらしを見て共に楽しみたいと思われたからである。」

人間は、偶然にこの世に存在しているのでなく、親神様によって、生活できる世界と共に創造された。しかも、人間生活の意義が「陽気ぐらし」にあることは、創造の時よりきまつているのである。

世界中の人間の生活は、所により時代によってどんなに違っていても、すべての人が陽気ぐらしを望んでいるのは、この理由による。

人間は始め非常に小さい生きものであったが、

次第に大きくなり、また様々な動物に生まれ変わりして、やがて今日のような人間になった。この人間の成人（成長）と共に、この世の姿も、人間が住みよいように変わって来た。これはみな親神様の心尽くしの守護による。

人間が現在、言葉話し、知恵を働かせて、色々な文化（人間のつくった財産）を持って生活できるのも、みな親神様の守護によるのである。

人間は、自分で働いてくらしているように思いがちであるが、決してそうではない。この世という親神様の世界に人間として生まれていることが、すでに親神様の守護であり、毎日生活できるのも親神様が心を尽くして守護しているからである。この恩を思わないで、自分勝手な考えや行いをするならば、天理にそむくことになるので、親神様がざんねんに思われて、その守護がなくなれば、どのようなあぶない道に行っ



この記事は、昭和59年に「天時時報」紙に連載されたものです。

てしまいかわからない。親神様と共にくらしていることをつねに思い返して、陽気ぐらしを忘れなようにすることが大事である。

親神様は、人間創造の際に予定を立てておられた年限（期間）が経ったので、この世の「創造の元の場所」（元のやしき「お屋敷」）に現れて来られ、おやさま（天理教教祖）をやしろ（社親神様の人間的顕現）として、この「元初まり」の真実をはじめ、お心にあることを人間にお話し下されたのである。

お話し下されたものが教理であるから、どんなに信じ難いようなことでも、また日常生活と余りにかけ離れているようにみえても、この教理をどこまでも信じていくことが陽気ぐらしの出来ない道である。

芹澤 茂（天理大学名誉教授）

この記事は、昭和59年に「天時時報」紙に連載されたものです。

幸せを届ける言葉

高橋美津志「ちよっとひとこと」

（善本社刊）から

心の修行

世の中に、病気をしないと断言できる、鋼鉄の肉体をもつ人はいないし、事情をみないと言いつける完全無欠の人もない。どんな人でも一生うちには、少なくとも二度や三度は病気にもなり、事情を見る。だが心の未熟な人は病気事情になると、理性を失い、苦闘の末、周りを泣かせて人生を狭くし、心の治まった人は病気事情から、心の大掃除をし、人生を明るくする。どんな災いも福にする、心の修行が大切だ。

おさしづの点滴 ⑦

一つの根から又々芽が吹く。同じ根なら同じ芽やで。めんめんの心を出さんよう。同じ根なら同じ芽が吹く心出せ。一日踏ん張る日々踏ん張る処に、そこに戻る処ある。それ救けに出る。

（補20・12・3）

【解説】

この道の信仰の「根」「元」は教祖にあります。その根に通じる心で通らせて頂くところに、信仰の新しい芽の発芽を体験させていただけます。教祖に通じる心に、教祖と同じ心になら

ていただきたいものです。

このおさしづは、その点が強調され、反対に「めんめんの心」自分勝手な心、自己中心的な思いは抱かないようにと戒められています。

よぶぎでもにんわたれともゆハねどももとハ壹ほんゑだわハほん

十一号15

「よぶぎ」すなわちようぼくの「もと」は教祖です。そこに通じること、「接ぎ木」をすることで、信仰が根につながるのです。

教祖に根付いた、通じた心になって「一日」また「日々」と踏ん張ります。そうならば、教祖が手を引き、導きに連れられます。「救けに出る」と言われています。

「生け花一寸弱いもの。根があれば根から芽が出る。又、節から芽が出る」（32・10・2）この道の信仰も元（根）・教祖に通じることが大切です。「元あればこそ花咲く」（22・10・10）の

同じ根なら同じ芽吹く元は一本、枝は八本

「元女一人天より道を運んだ一つの理や」「元あればこそ花咲く」（22・10・10）「根のある花」（24・11・1）とも言われているところです。

【おさしづ全文】

補 明治二十年十二月三日 午前八時
藤田佐兵衛身上伺（元斯道会第七号 周旋方）

さあく、だんくの事を聞いてだんく通る。一々尋ねるから、一々のさしづする。あちらく踏ん張る。一つの根から又々芽が吹く。同じ根なら同じ芽やで。めんめんの心を出さんよう。同じ根なら同じ芽が吹く心出せ。一日踏ん張る日々踏ん張る処に、そこに戻る処ある。それ救けに出る。内々あ、結構やったなあと、心を一日十日二十日、この理篤く受け取るで。だんく、だんくの道があるで。内々の処、程よくとのさしづして置くこと。